

第6回 『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

・いつまでするのか

いつまでするのかということをごどのようにして伝えればよいのでしょうか。今回はいつまでするのかを伝えるということを考えてみます。

活動の終わりを知らせるために、視覚的な構造化の考え方を取り入れて工夫することは一つの方法です。授業などの終わりを知らせるために、課題の量で調整するという方法です。課題を進めるにつれてその材料が無くなっていき、それが全部無くなると終わりというようにルールを決め、「どれだけするのか」を視覚的にわかるようにするという工夫のことです。写真はその例です。左側にある三段ボックスに今日する課題が入っています。

終わった課題は右側のかごの中に入れていきます。左側の三段ボックスの課題がなくなったら終わりということになります。このような方法は、量が明確な物については有効で効果的です。しかし、活動によ



っては、量を具体物で示すことが困難であるものも少なくありません。例えば、テレビゲームの終わりなどを伝えるような場合などです。「はい終わり」というように伝えるだけで、どのようになったから終わりであるというようなことは伝わっていないことが多いのではないのでしょうか。このように、具体物による量が明確でないものについては、「どれだけするのか」ということを伝えるのは難しいということなのです。

このような場合、最も便利な方法は、時間を知らせることです。「あと残り〇〇分」とか「〇〇分までする」というようなことが理解できれば、「終わり」に対する見通しを持つことができるようになると考えられるからです。ところが、時間は目に見えないものなので、それを量として理解するのはとても難しいことです。われわれでも「あと少し」と言葉で伝えられた場合、それぞれがイメージする時間は様々です。時間を量としてイメージするのは難しいということです。そこで、この見えない時間を見えるようにし、理解しやすくするための道具として時計があるということです。デジタル時計やアナログ時計を使って私たちは見ることのできない時間を視覚化して、日常生活のなかで活用しているということなのです。

しかし、知的障がいや自閉症のある人のなかには、デジタル時計の数字を読むことができても、それを時間として理解し、それを量として考えることが困難な人や、アナログの時計を見て、短針と長針の位置は理解することができても、そこから時間を読み取ることが困難である人が少なくありません。日常的に使われている時計では、理解することができない人も多いということなのです。

そこで、日常生活で使われている時計からは時間を理解することができにくい人のために、タイムエイドとよばれる支援機器も開発されています。これらを使って時間を量として視覚化し、終わりなどを分かりやすく伝えるようにするのは、では、どのようなタイムエイドがあるのか、次回に紹介しましょう。お楽しみに！！